

「視覚障害者・支援者がともに高齢である夫婦世帯」への関わりの1事例

武田 貴子・藤崎実知子

(北九州市立介護実習・普及センター)

要旨：

高齢化に伴い、視覚障害者当事者も支援する家族も高齢者である高齢夫婦世帯の増加が予想される。本研究では、「中途視覚障害者緊急生活訓練事業」の中で、歩行訓練士が介護支援専門員、作業療法士の他職種と連携して生活訓練を実施したことで、夫の介護負担が軽減された支援事例について報告する。訓練後に介護負担が軽減されたのは、訓練士が受講者及び家族が一番困っている「見えにくさ」とそれから起こりうる生活上の困難さや支援の大変さなどを家族と共感し、関わる専門職に伝える事で、家族が安心して支援を受けられた事も大きいのではないかと考えられる。

キーワード： 高齢夫婦世帯、歩行訓練士、他職種連携

1. はじめに

北九州市保健福祉レポート2016¹⁾によると、北九州市は政令指令都市の中で高齢化率が最も高く28.6%である。また、高齢者単身世帯の割合は33.7%、高齢者夫婦世帯25.9%で増加傾向にある。今回は、北九州市立介護実習・普及センター（以下、センター）で実施している「中途視覚障害者緊急生活訓練事業（以下、「訓練事業」とする）」²⁾のうち、視覚障害当事者も支援する家族も高齢者である高齢夫婦世帯に対して、歩行訓練士が他職種と連携したことで介護負担の軽減が図られた支援の事例について報告する。

2. 症例

2.1. 訓練受講者プロフィール

受講者：89歳 女性

病名：右) 緑内障、角膜混濁、白内障

左) 緑内障（40代で眼球摘出、義眼）

既往歴：糖尿病・難聴・認知症の疑い

障害等級：視覚障害5級（右0.2 左0）

介護保険：要介護4（退院直後に認定）。

現在、介護支援専門員不在で利用もない。

障害支援区分：申請なし。

家族構成：夫83歳と2人暮らし。

2.2 経緯

自宅にて転倒し、右目を打撲する。A眼科を受診した際、視力低下をきたしており、治療のために入院する。退院後、家族が福祉事務所に「妻が見えなくなって困っている」と相談に行き、当事業での支援を紹介された。

来所の相談時に歩行訓練士（以下、「訓練士」とする）が対応した。自宅にて2人で過ごすことが多く、買物・通院以外の外出はほとんどない状態である。以前は介護保険の利用もあり、デイサービスの利用もあったが、介護支援専門員（以下、「CM」とする）とケアスタッフに「見えにくい事を理解していない。単に高齢者としてしか支援をしてくれない。」と夫の不満から利用をやめてしまい、現在は何のサービスも利用していない状況であった。子どもはなく、近く

に頼れる親戚もいない状況である。夫は、「目薬を1本1本時間を計りながら注している」等、とても丁寧に細やかに支援しており、「減塩食ではないとダメ」と食事や家事全般もこなし、「妻の事は自分しかわからない」と夫が一人で抱え込んでいるように感じられた。そこで訓練事業を紹介し、訓練受講に至った。

3. 訓練の経過

3.1. 面接

訓練申請後、訓練士が面接のために自宅を訪問し、訓練受講者（以下、「受講者」とする）とともに夫のニーズにも注意して聞き取りをおこなった。ニーズとしては、受講者からは「話し相手が欲しい」、夫からは「介護負担が大きい」事が語られた。また、面接時に質問するたびに夫が受講者に大きな声で伝えており、約1時間の面接で夫も受講者も疲れた様子であった。介護負担が大きく、夫に何かあると受講者の生活も心配される事から夫の支援も必要であると考え、Zarit (J-ZBI_8) (以下、「J-ZBI_8」とする)³⁾で介護負担度について評価することとした。訓練前のスコアは25点であった(表1)。

3.2. 訓練内容

全17回の訓練を実施した。内容は、歩行訓練を1回、日常生活訓練を9回、社会参加訓練を7回おこなった。

表1 Zarit 介護負担尺度日本語版のうち8項目 (J-ZBI_8) 認知症初期集中チーム版

	0点 思わない	1点 たまに 思う	2点 時々 思う	3点 よく 思う	4点 いつも 思う	備考
1 患者さんの行動に対し、困ってしまうと思うことがありますか。			●		○	
2 患者さんのそばにいると腹がたつことがありますか。		●	○			
3 介護があるので家族や友人とつきあいがづらくなっていると思いますか。					●●	
4 患者さんのそばにいると、気が休まらないと思いませんか。			●	○		
5 介護があるので自分の社会参加の機会が減ったと思うことがありますか。					●●	
6 患者さんが家にいるので、友達を自宅に呼びたくても呼べないと思つたことがありますか。					●●	
7 介護を誰かにまかせてしまいたいと思うことがありますか。	●○					
8 患者さんに対して、どうしていいかわからないと思うことがありますか。	●				○	
合計						訓練前 ○ 25点 訓練後 ● 17点

(訓練前後の変化が分かるように小計欄を省略し訓練前後を同一シートにまとめた)

歩行訓練では、夫との移動の際、受講者が夫のズボンのベルトを持っていて、夫が受講者を支えるには負担が大き過ぎ支えきれていない状態であった。そこで、当センターの作業療法士(以下、「OTとする」)に同席を依頼し、白杖の選定と手引き歩行の仕方についてともに検討した。OTが歩行のバランスや歩容を評価し、訓練士が身体支持併用型の白杖を紹介し、一緒に安定する白杖の長さを検討した。身体支持併用型の白杖を使用する事で、受講者自身の支持と歩容を改善させる事ができ、支える夫の負担も軽減し、最終的に2人の歩行が安定する事ができた。

日常生活訓練では、訓練士が視覚障害関連の利用できる制度、補装具・日常生活用具の紹介、使用訓練を実施した。また、聞こえの問題を解決するためにOTに同席してもらい、助聴器を紹介してもらった。夫より入浴時の支援についての相談があったため、同様にOTが運動機能を評価し、動作を指導した。その際、訓練士は機器の説明やコントラスト等に配慮することで受講者及び夫の不安の軽減を図った。その他、高齢者向けの用具で受講者に利用可能な福祉用具についてもOTに紹介してもらった。福祉用具の導入の際、介護保険制度を利用する事で費用負担の軽減が図れるので、介護保険の利用も勧めた。新たな事業所を選択し、CMに同席してもらい、介護保険の制度、デイサービス等を紹介してもらった。福祉用具制度の利用をきっかけに、介護保険サービスの利用について苦手意識が軽減されCMの介入によって安定した生活の継続が期待された。

社会参加訓練では、「話し相手が欲しい」という本人のニーズから、訓練事業の中の社会参加訓練(視覚障害者のつどい)を紹介し、夫婦での参加を勧めた。

4. 結果

訓練士を中心にOTとCMとの支援者の連携を図ることが出来た事で以下のような成果を得られた。

歩行訓練では、夫との手引き歩行が安定し、バランスよく歩けるようになった。また、白杖

を使用することで、周りからの注意喚起を受けやすくなった。

日常生活訓練では、助聴器を自費購入し、日常会話を楽に聞き取ることが可能となり、夫も大きな声を出さずに疲れやイライラの軽減を図れた。また、浴槽台を介護保険の制度を利用して購入し、浴槽内滑り止めマットも自費購入し、入浴の動作も指導を受けてスムーズになった。

社会参加訓練では、夫婦で参加し受講者及び夫も病院以外で人と接する機会となった。同じ悩みを持つ参加者と会話をする中で会話を楽しみながら介護保険の利用や事業所等の情報を入手する事が出来た。受講者からは「来てよかった。」との声が聞かれ、夫からも「参加してから気分がよくなり楽しくなった」と夫婦ともに笑顔がみられている。

家族の介護負担は、J-ZBI_8の合計スコアが25点から17点になり、介護負担が軽減された。特に変化が大きかったのは、項目8で「患者さんに対して、どうしていいかわからない事がありますか」が、「いつも思う」から「思わない」まで変化がみられた。

5. 考察

訓練士は、視覚障害についての特性を捉えた視覚障害に関する情報提供と訓練が実施できる。OTは、運動機能、認知機能を評価したうえでの生活能力にあった情報提供ができる。CMは高齢者の利用できる制度である介護保険に関する情報提供と必要に応じてケアプランを立て安心安全な生活環境を整える事ができる。今回、訓練後に介護負担が軽減されたのは、訓練士が受講者及び家族が一番困っている「見えにくさ」とそれから起こりうる生活上の困難さや支援の大変さなどを家族と共感し、関わる専門職に伝える事で、家族が安心して支援を受けられた事も大きいのではないかと考えられる。

J-ZBI_8の項目7「介護を誰かにまかせてしま

いたいと思うことがありますか」が、「思わない」のままだった事は心配されるが、項目8で「患者さんに対して、どうしていいかわからない事がありますか」が、「いつも思う」から「思わない」まで変化がみられたのは、任せるには至らないまでも、「困った時に相談できる支援者」がいる事を理解してもらう事ができたからだと考えられる。

6. 今後の課題

受講者も夫も、今後も2人での生活を望んでおり、夫は他者に任せず「自分で支援したい」と強く思っている。その希望を叶えながら、夫の加齢や受講者の生活機能の低下により、夫だけの支援では難しくなった時、すぐに相談でき、支援が入れるよう、今後はCMをコーディネーターとして、チームで支援していく必要があると考えられる。

また、訓練受講者には今回のような高齢の夫婦世帯や単身世帯が増える事が予想される。本事例のように他職種との連携を図りながら生活支援の視点で訓練にあたっていきたいと考えている。

文献

- 1) 北九州市 (2016) 北九州市保健福祉レポート. 272-273.
- 2) 武田貴子・伊東良輔・中村龍次 (2013) 北九州市における中途視覚障害者へのリハビリテーションの変遷と展望. 視覚リハビリテーション研究, 3(1), 40-44.
- 3) 荒井由美子・田宮菜奈子・矢野栄二 (2010) Zarit介護負担尺度日本語版の短縮版(J-ZBI_8)の作成その信頼性と妥当性に関する検討. 日本老年医学会雑誌, 40(5), 497-503.

註

本研究の一部は、日本ロービジョン学会でポスター発表したものである。